

病害虫発生予察情報（2月予報）

令和2年1月29日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (県平均平年値)	予報の根拠
トマト	灰色かび病	発生量：並 (発病株率 5.1%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：並 (発病株率 7.7%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	黄化葉巻病発生量：多 (発病株率 2.7%) コナジラミ類発生量：多 (寄生株率 2.2%)	1月中下旬発生量 黄化葉巻病：やや多 (+) コナジラミ類：多 (+) 気象予報：気温：高い (+)
タマネギ	腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 1.0%)	1月下旬発生量：少(発生なし) (－) 防除員からの情報：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	灰色腐敗病	発生量：やや多 (発病株率 0.0%)	1月下旬発生量：並(発生なし) (±) 防除員からの情報：やや多 (+) 気象予報：降水量：多い (+)
	ネギアザミウマ	発生量：多 (寄生株率 35.7%)	1月下旬発生量：やや多 (+) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (－)
レタス (非結球 レタスを除く)	べと病	発生量：並 (発病株率 1.3%)	1月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	斑点細菌病	発生量：やや多 (発病株率 2.4%)	1月中旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
イチゴ	うどんこ病	発生量：並 (発病株率 1.1%)	1月中下旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (+)
	灰色かび病	発生量：やや多 (発病株率 1.2%)	1月中下旬発生量：やや少 (－) 気象予報：気温：高い (+) 降水量：多い (+)
	アブラムシ類	発生量：やや多 (寄生株率 1.2%)	1月中下旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (+)
	ハダニ類	発生量：やや多 (ただし西部地域は、やや少) (寄生株率 11.6%)	1月中下旬発生量：並 (±) ただし西部地域は、少 (－) 気象予報：気温：高い (+)
	アザミウマ類	発生量：多 (ただし西部地域は、やや少) (寄生株率 4.1%)	1月中下旬発生量：多 (+) ただし西部地域は、少 (－) 気象予報：気温：高い (+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索！



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【トマト】

<生育の概況>

生育は平年並～やや早い状況である。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率 1.7%（平年 4.3%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（本病の生育適温は 23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 朝夕の急激な冷えこみによる結露は、本病の発生を著しく助長する。そのため、暖房機利用や循環扇による通風などにより植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- ・ 株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・ 予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 発病した果実や茎葉は伝染源となるため速やかに取り除き、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。

●葉かび病・すすかび病

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、平均発病株率 6.0%（平年 12.2%）と発生は平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する（生育適温は、葉かび病 20～25℃、すすかび病 27℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が悪いため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・ 多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・ 本県では12月以降は葉かび病が優占する傾向がある。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・ 1月中下旬の巡回調査では、黄化葉巻病は平均発病株率 3.6%（平年 3.0%）と発生は平年よりやや多かった。
- ・ コナジラミ類は、平均寄生株率 17.4%（平年 3.3%）と発生は平年より多かった。一部ほ場で特に多発していたため、平均寄生株率が引き上げられ、高い数値となっている。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中深く埋めるなどして適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミ成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させ、黄色粘着板を設置し本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。

【タマネギ】

<生育の概況>

気温が高く降水量が多いことから、生育は平年より7日早くなっている。

●腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年の平均発病株率0.1%）。ただし、防除員からの情報では、やや多いとの報告がある。
- ・本病は、凍霜害や強風雨、ネギアザミウマの食害等による傷口部から感染しやすく、気温が高いと感染・発病が助長される。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・傷んだ葉がある場合は、降雨の直前に予防散布を行う。また、ネギアザミウマの発生に注意し、本虫の防除を実施する。

●灰色腐敗病

予報の根拠

- ・1月下旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平年の平均発病株率0.0%）。本病は鱗茎だけでなく、葉にも斑点状の症状が現れることがある（ボトリチス葉枯症）が、ボトリチス葉枯症の平均発病株率は0.6%（平年0.7%）と平年並であった。
- ・本病は多雨で発生が助長される。1か月予報では、降水量は平年より多いため、発病を助長する。

防除対策

- ・降雨が続く場合は、薬剤散布により防除する。薬剤の選択に当たっては病虫害防除基準（URL：<http://www.s-boujo.jp/>）を参照する。
- ・被害株やくず球は、ほ場付近に放置すると発生源となるため早期に取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・ 1月下旬の巡回調査では、平均寄生株率 42.2%（平成 32.6%）と平成よりもやや多かった。被害程度を示す被害度は、49.8（平成 8.5）と著しく高かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平成よりも多いが、気温は平成よりも高いため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 今年気温が平成よりも高いことから、すでに株上で盛んに増殖している。このため、密度が高いほ場では速やかに防除を実施する。成幼虫ともに葉と葉の隙間に多く寄生しているため、寄生部位に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

【レタス（非結球レタスを除く）】

＜生育の概況＞

生育は平成よりも早い状況である。

●べと病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、発生は見られなかった（平成発病株率 1.6%）。
- ・ 1か月予報では、気温は平成よりも高く、降水量は平成よりも多いため、発生を助長する（病原菌の生育適温は 10～15℃で、多湿を好む）。

防除対策

- ・ 初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、過湿にならないよう換気に努める。

●斑点細菌病

予報の根拠

- ・ 1月中旬の巡回調査では、平均発病株率 1.7%（平成 2.3%）と発生は平成よりもやや少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平成よりも高く、降水量は平成よりも多いため、発生を助長する（トンネル被覆後に結露するような高湿度になると発生が多くなる）。
- ・ 凍霜害は茎葉を傷めて病原細菌の感染を助長させるため、発生に注意する。

防除対策

- ・ 発病は主に結球期以降であるが、結球前に薬剤の予防散布をして葉面の病原細菌密度を下げるのが大切である。
- ・ 降雨が続くときや初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ トンネル被覆後は、トンネル内が高温多湿にならないよう換気に努める。

＜その他の病害虫＞

●ビッグベイン病

1月中旬の巡回調査では、平均発病株率2.9%（平年2.3%）と平年よりやや多い発生であった。本病は土壌中に生息する菌によって媒介される土壌伝染性のウイルス病である。そのため、発病株の見られるほ場の土を靴や農機具などにつけて他のほ場に持ち運ばないように注意する。また、発病株は根ごと取り除き、土壌中のウイルス保毒菌量を少なくするように心がける。例年、志太地区で発生が多いため、当該地域では特に発生に注意する。

【イチゴ】

＜生育の概況＞

生育は平年よりやや遅い地域からやや早い地域まであり、地域によってばらつきがある。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、県全体の平均発病株率は0.3%（平年1.6%）と発生は平年より少なかった。
- ・本病は気温が20℃前後のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高いため、ハウス内の気温は本病の発生には適する。

防除対策

- ・株の過繁茂は本病の発生を助長させるため、不要な下葉、果梗枝は除去する。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌が出現しないようにローテーション散布する。
- ・今後は果実での発生も多くなるので、発病した果実は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●灰色かび病

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、発病株率は1.3%（平年0.6%）であったが、一部の多発ほ場を除くと、発生は平年並～少なかった。
- ・本病は気温が20℃前後で、多湿条件のときに発生しやすい。1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、ハウス内は本病の発生に適する。

防除対策

- ・天窓、側窓の開閉、かん水に十分注意し、ハウス内が多湿にならないようにする。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし、耐性菌が出現しないようにローテーション散布する。
- ・枯葉、老化葉及び不要な果梗枝は速やかに取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。

●アブラムシ類

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は1.4%（平年1.7%）と発生は平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・発生に注意し初期防除に努める。すでに発生しているほ場では早急に防除する。
- ・天敵を利用している場合は、アブラムシのマミーの発生状況をよく観察する。
- ・アブラムシ類が多発した場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は東部地域では10.2%（平年8.8%）、中部地域では20.0%（平年19.1%）と平年並の発生であったが、西部地域では4.4%（平年11.2%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ハダニ類の寄生が認められた場合は少発生のうちに防除を徹底する。なお、ハダニの発生している株が点在している場合は、発生株周辺にスポット散布するなど、迅速に対応する（農薬の総使用回数に注意する）。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、物理的に作用する剤（気門封鎖剤）や天敵を利用する。また、物理的防除剤は卵への効果が低く、残効性が期待できないため、5日前後の間隔で連続散布する。
- ・天敵を利用している場合は、ハダニ類と天敵の発生状況をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼または薬剤散布をする。薬剤散布する場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択する。

●アザミウマ類

予報の根拠

- ・1月中下旬の巡回調査では、平均寄生株率は東部地域では2.0%（平年1.1%）、中部地域では10.8%（平年4.5%）と平年より多い発生であったが、西部地域では0.2%（平年1.3%）と平年より少ない発生であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・アザミウマ類は花を好むため、花での発生をよく観察する。また、必要のない花は摘み取る。
- ・例年多発生するほ場では、開花初期に防除を徹底する。
- ・天敵を利用している場合は、天敵（カブリダニ、アブラバチ等）に影響の少ない薬剤を選択し散布する。

【イネ】

＜その他病害虫＞

●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

防除対策

- ・ 県内全域で分布が徐々に拡大している。昨年は暖冬の影響で多発したが、今年も暖冬であり、今後も気温が高くなる予報であるため注意を要する。
- ・ 昨年7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 本種は低温に比較的弱いいため、地表面の貝は1～2月に死亡する可能性があるが、土中の貝は生き残るため、2月中にロータリー耕を行い、越冬貝を粉砕する。ロータリー耕は細かく、また回数が多いほど効果が高い。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を粉砕する。
- ・ スクミリンゴガイには、人体に有害な寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめる。

【チャ】

＜その他の病害虫＞

●赤焼病

- ・ 病原菌は細菌である。本病は寒害、霜害によって発生が助長されるため、凍霜害が発生する（した）場合は注意が必要である。
- ・ 初発を確認したら速やかに銅を含む殺菌剤を散布し、その後発生状況をみながら追加防除する。
- ・ 常発ほ場で凍霜害を受けた場合には発病を待たずに速やかに薬剤散布を行うことが望ましい。特に、幼木園や、つゆひかり、おくひかりなどの品種は注意する。
- ・ マシン油乳剤散布は本病の発生を助長するので、ダニやコナジラミ防除のためにマシン油乳剤を散布する場合は、その1週間以上前に銅剤を散布しておく。

●チャトゲコナジラミ

- ・ 寄生密度の高い茶園では、一番茶時期の成虫の発生を抑制するため越冬幼虫を対象に防除を行う。
- ・ 幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように丁寧に散布する。
- ・ マシン油乳剤を散布すると赤焼病の発生を助長するので、赤焼病の発生が心配される茶園では、マシン油乳剤を散布する1週間前までに、銅を含む殺菌剤を散布する（マシン油乳剤との混用散布は、殺菌剤の効果を著しく低下させるため行わない）。

3 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和元年1月23日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 1月25日から2月24日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪の日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、低い確率50%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	20	70
1か月	降水量	10	30	60
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	10	20	70
2週目	気温	10	20	70
3～4週目	気温	20	30	50

【予報の対象期間】

- 1か月 : 1月25日(土)～2月24日(月)
1週目 : 1月25日(土)～1月31日(金)
2週目 : 2月1日(土)～2月7日(金)
3～4週目 : 2月8日(土)～2月21日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1
TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780
URL <http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>